

栃木の 企業力

足利市江川町の「シーアンドシー硝子研究所」は自動車のヘッドランプやウインカー、カメラのストロボに利用される電球のフィラメントを固定する微細なビーズガラスの切断や加工、着色を行う。現在は、液晶テレビの画面を後ろから照らすバックライトを固定するビーズガラスの生産が主力だ。

ビーズガラスは電球のフィラメントや蛍光管と電極の接続部分を固定するガラスで直径約1〜3ミ。工場では、業者から購入した長さ約120〜150ミのガラス管を3等分にした後、2000〜30

シーアンドシー 硝子研究所



作業を見つめる岡崎社長(左)

精密な切断技術 新分野に

00本を接着剤で固定する。固定したガラス管をダイヤモンドカッターを利用して、1〜3ミの厚さで切断。ガラス管は細いため、接着剤で一定数を束ねないと細かく切るこ

前の会社で行っていた自動車のライトや、カメラのストロボ用のビーズガラスの切断や加工、着色などを行ってきた。転機は液晶テレビ用のビーズガラスの生産を始めた20

ビーズガラスを生産し、世界市場での占有率は約25%となった。05年からは、社員にけじめや自立心をつけさせ生産性や品質向上のため「5S運動」

への取り組みを始めた。「5S」は「整理」「清掃」「整頓」「清潔」「しつけ」の頭文字。作業の各工程を「テーパーパーク」に例え、ガラス管に接着剤をつける工程を「やきとり屋」、ガラスの接着剤を洗浄する工程は「ラーメン屋」などと名付けた。各テーパーパークの責任者を決めたことがやる気や責任感につながったという。5Sの取り組みは足利商工会議所全体に広がり、一部上場企業からも視察が訪れる。

(岡本朋樹)

1993年設立。資本金300万円。2001年に工場の敷地を2倍に拡張。従業員は26人で、09年度の売上高は6億2000万円。

とができない。その後、接着剤を洗い落とし検査を通ったものが製品となる。

「シーアンドシー」は1993年、現社長の岡崎健二さん(58)が、東京のガラス加工会社が足利から撤退後、同社に勤めていた従業員らで設立した。社名の「シーアンドシー(C&C)」はガラスの切断(Cut)、着色(Color)の頭文字。設立当初は

00年頃。当時のテレビはブラウン管が主流で価格も割高だったが、「液晶テレビは成長が見込める。今までの技術を応用すればバックライト用のビーズガラスを生産出来る。打って出よう」(岡崎社長)と生産を始めた。

01年には生産拡大を見込み、600坪だった工場の敷地を倍に。生産がピークを迎えた08年には月に約1億個の

近年、ビーズガラスを使用しない発光ダイオード(LED)を利用した液晶テレビの台頭で状況は厳しいが、ガラス切断の技術を応用し太陽電池や半導体のシリコン切断への挑戦を目指す。岡崎社長は「これまでのノウハウを生かす、新分野に挑戦したい」と意気込んでいる。